

**「大妻女子大学人間生活文化研究所の研究と歴史」
P134～135より抜粋**

『大妻女子大学人間生活文化研究所の研究と歴史』，
大妻女子大学人間生活文化研究所，
2019，
<https://www.ihcs.otsuma.ac.jp/ebook/book.php?id=63>
(参照 2020-06-09)

4.5. 外部競争的資金「科研費」獲得支援事業

研究所が行っている研究活動支援事業である「共同研究プロジェクト」「大学院生研究助成」「研究所研究員研究助成」「戦略的個人研究費」は、いずれも研究計画書の作成、申請、成果の報告等に関する様々なノウハウや注意すべきポイントがあり、若手の研究者やこうした業務に不慣れな教員にとって

は、大きな負担となり、ひいては申請を断念することにもつながりかねない。そこで研究所では、2011年度より、一年に数度の科研塾（科研費を取得するための研修会）と通年通じて個別の相談業務を行っていて、好評である。

「科学研究費」獲得事業「科研塾」と個別相談から

久保 陽介

一般社団法人先端科学技術研究支援協会 理事長



科学研究費（以下科研費）は1918年（大正7年）に「科学奨励金」として始まり、1939年（昭和14年）に「科学研究費交付金」となりました。2018年で前身である「科学奨励金」から数えると、100周年迎え、日本の科学研究を長きにわたって支援してきた制度です。また現在、日本政府がボトムアップ型の競争的研究資金として行なっている唯一の制度です。科学技術振興機構や新エネルギー・産業技術総合開発機構が実施するトップダウン型の競争的研究資金とは異なり、どんな分野のどんな研究でも受け入れる唯一の制度という事です。

科研費の制度は、2018年が100周年にあたりと言う事もあり、50年ぶりの大きな改革が行われました。審査制度の根本を変える改革であり、日本学術振興会が「半世紀ぶりの大改革」と言うに相応しい改革です。

また国立大学の法人化、そして運営交付金の削減の流れもあり、科研費への応募は急増しています。平成の30年間で毎年のお応募数は約2倍となり10万件/年を超えました。それに伴う予算措置も行われており、採択率は25%前後を維持しています。文部科学省と日本学術振興会は採択率30%、充足率

（応募時の申請額に対して交付額の占める比率）70%を目標としていますが、応募数の増加によって25%の維持に留まっています。

公式な統計はありませんが、制度や応募数・採択数以外に、質の観点でも大きく変わりつつある様です。長く審査をやって来たベテラン審査員委員の先生数名に、審査委員の手元に届く申請書の質について聞いた事があります。「審査を担当する中で、一読して採択に値しない事が明確な申請書はどれくらいありますか？」と、いう質問です。非常に失礼な質問だと思いますが、あまり読まずに不採択に回すという扱いを受けるケースは、多かれ少なかれあります。「100件読んで1件もない年もある、1,000件中に数件程度だろう」という分野や「3割は読むに耐えない」という分野もありました。比較的后者が多かった印象です。しかし、ここ数年、その分野の審査委員の方が「1割以下になってきた。」と、答えています。

この様に、質の向上により、科研費競争競争は年々激化する傾向にあります。質の向上は、各大学が科研費対策のセミナーを行ったり、How to本が出回るなど、申請者に申請ノウハウが広がり始めた事が要

因だと思われます。私が科研費に関するサービスを始めた頃は、科研費対策を行っている大学は限られていました。そういう時代は終わりつつある様です。

大妻女子大学では、2011年より科研費獲得事業「科研塾」を開始しています。私立大学の中では、比較的早期に事業に取り組んだ大学だと思われます。「科研塾」の様な科研費のセミナーには3つの段階があります。①科研費というシステムの存在を知って貰うセミナー、②科研費への応募を促すセミナー、③科研費の採択率向上を目指すセミナーの3段階です。この段階は、主催者側の希望通りに進める事は出来ず、参加者の方に合わせて進んで行くものです。「科研塾」は中心となる部分が①から徐々に③に遷移していき、より実践的な物になっていきました。私が見聞きする文系中心の私立大学の話では、セミナーは行えても②で留まっている場合が多く、ここが「科研塾」の特徴になっています。また開催頻度も他大学と比較して充実しています。

科研費セミナーの質疑応答の質問内容で、参加者の状況がある程度見えてくる部分もあります。科研費セミナーの参加者は、私に関わる他のセミナーと比較して、応募と採択への意欲がある母集団で、自分の申請課題に対する具体的なイメージを持っている方が多い様に見えます。上司に言われて渋々応募させられる母集団の場合とは明らかに違い、前向きであり、質問の内容も年々高度化して来ており、知識と経験の蓄積が進みつつある事が伺えます。

私が行っているセミナーにはいくつか種類があります。科研塾では、新人研究者向けの科研費制度と科研費スタート支援の紹介セミナー、審査制度の解説とその対策を主としたセミナー、当該年度の制度変更とその対策を主としたセミナーを開催させて頂いています。昨年には大規模な科研費改革があり、その解説に時間を割かれてしまいました。科研費攻略法という視点の説明が不足したと感じ、2019年度はその部分を補えればと思っています。また、科研塾では行って来なかった、前年度不採択者の再挑戦を支援する取り組みを新たに行いたいと考えています。他大学では再挑戦セミナーが1番好評になっており、大妻女子大学でも成果が出ることを期待しています。

セミナーの他に各研究者の方への個別相談も行なっています。申請書を完成させる為には、2つの視点が必要になります。1つは当該研究分野の専門家としての視点、もう1つは、分野への理解はある

が、専門的に研究を行っていない、いわば素人としての視点です。後者が必要になるのは、審査委員が当該分野のエキスパートではないからです。食物栄養の申請書を、服飾文化の研究者が審査を担当する事があるぐらいです。採択を受けるには、全審査委員から平均以上に良い評価を得る必要があります。全審査委員から良い評価を得るには、内容や研究の面白さを理解出来ない審査委員をゼロにする必要があります。その為に、専門家から一步と遠い素人的な視点が必要となります。申請書作成の専門家であると同時に、研究課題についての素人の視点を合わせてアドバイスをさせて頂くのが個別相談です。

他大学も含めると、毎年200件ぐらい個別相談を受けています。色々な分野の研究者の方の書類を見せて頂く中で、各分野の面白みを聞くことが出来たり、各分野の価値観を聞くことが出来たりし、個別相談は私としても毎年楽しみにしています。各分野の研究者の方々と個別相談を重ねる中で色々学ばせて頂き、「この研究者課題なら、別の切り口で別の分野で応募したら、もっと面白いと思ってもらえますよ」という事も見えて来ます。

大妻女子大学の研究者の方々は、大学の規模に対して研究分野が多様なのと、再相談、再々相談の比率が高い事が特徴です。大妻女子大学では、その分野の研究者で初めてお話させて頂く方である場合も多く、私にとっても勉強になると同時にお話が興味深く楽しみにしています。今後は再挑戦のセミナーと合わせて、再挑戦の為の個別相談を行いたいと思っていますので、残念ながら悔しい思いをしてしまった方からの相談をお待ちしております。

研究費の獲得は、研究者自身がやりたい研究を実現するのに必要な手段であります。しかし、昨今の流れとして、科研費を始めとする競争的研究資金は大学の評価や、研究者の評価に論文実績と並んで外部資金獲得実績が取り入れられつつあります。このような両側面で研究費の価値は増しているといえる状況です。そんな状況にある科研費の採否が、研究の中身ではなく、書き方に左右されてしまう事に私は疑問と苛立ちを感じこのサービスを始め、科研塾に関わって参りました。大妻女子大学の研究者の皆様が、自身の研究を申請書の書面で伝え切った上で採択を勝ち取る事を切に願いつつ、今後も科研塾を通じて皆様の研究のお手伝いをしていければと思っています。